

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520380

研究課題名（和文） 「満洲国」の新聞の文芸欄に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study of the literature and arts columns in the newspapers of "Manchukuo"

研究代表者

大久保 明男（OKUBO AKIO）

首都大学東京・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：10341942

研究成果の概要（和文）：本研究は「満洲国」で発行された主な中国語新聞の文芸欄に関して、その全体的な状況を把握し、基礎的な事実の解明を目指すものである。初歩的な成果として、これまで日中両国に分散所蔵されていた新聞資料の所在を突き止め、各新聞文芸欄の状況を大まかに把握することができた。また、一部の新聞文芸欄について、その解題や掲載記事の目録を作成しつつ、「満洲国」時期の文学にとって新聞の文芸欄が果たした役割や意義について、総合的な考察や論証を通じて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research aims to grasp the overall situation of , and elucidate the fundamental fact about , the literature and the arts columns of the main Chinese newspapers published in "Manchukuo". As an elementary result, the whereabouts of such newspaper data in Japan and China were traced , and the situation of the literature and the arts columns was generally grasped. Moreover, bibliographical notes and a list of the titles from such columns of some newspapers are creating continuously. This research considers and clarifies the partial role and meaning achieved by these newspaper columns for the literature of "Manchukuo".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学 中国東北 中国現代文学 新聞文芸欄 植民地文学 満洲国 国際情報交換 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

（1）近年、かつて日本の植民地支配下地域の文学・文化に対する研究は盛んにおこなわ

れ、一定の成果が見られた。しかし、朝鮮や台湾に比べ、「満洲国」に対する研究は相対的に貧弱であったと言わざるをえない。たと

えば台湾文学に対する研究では、内外において1980年代頃から始まり今日まで持続的におこなわれ、下村作次郎著『文学で読む台湾』や中島利郎編『日本統治期台湾文学小事典』など、多くの優れた研究成果が得られた。対して「満洲国」文学の先行研究では、川村湊をはじめとする一部の日本文学研究者による成果はあるが、中国文学側からは岡田英樹『文学から見る「満洲国」の位相』（研文出版、2000年）のほか目立つものがほとんど見あたらない。

一方、中国国内に目を転じれば、1980年代末から90年代初頭までの一時期、旧満洲で活躍した作家の名誉を回復するための「研究」が盛んで、「東北淪陥時期文学史」のような研究書も数冊出版された。しかし、その後は研究活動が不振に陥り、しかもそれまでに刊行されていた研究書には多くの誤謬や偏向があったことを指摘しておかなければならない。

(2)このような状況が生じたのはさまざまな理由が考えられる。たとえば、「満洲国」時代の文学に関して、日中両国の研究界では長い間タブー視してきたこと、研究が解禁されてもそれを総体的に捉えることなく、それぞれ「自国」文学史の一部として扱ってきたこと、また、研究における手法や立場の違い、言葉の壁、政治的な影響などで日中双方において研究の対象が偏っていること、両国間の学術交流も活発ではなかったことなどだ。

さらにより大きな問題点は基礎的な史料や文献が決定的に不足していることを挙げなければならない。殊に、「満洲国」において（特に1940年以前）多くの文学作品を世に送り出した媒体は、雑誌や単行本ではなく、実は新聞の文芸欄であったにも関わらず、その文芸欄に関する先行研究も基礎的な史料も皆無に近い状態であった（管見では岡田英樹著「<夜哨>の世界」、神谷・木村編『<外地>日本語文学論』世界思想社、2007年、の一点のみだった）。

2. 研究の目的

先に述べたような研究状況を打破するために、本研究は「満洲国」で発行された主な中国語新聞の文芸欄について、その全体的な状況を把握し、基礎的事実の解明を目指した。

全体構想としては、各主要漢字紙の文芸欄について、刊行の時期や期間、特色や傾向、主編及びコラム担当者、掲載された作品と作者、読者層とその反応などの基礎的な事実について、調査・分析・論証することによって明らかにするとともに、「満洲国」の文学における新聞文芸欄のはたした役割について究明しようとするものである。

3. 研究の方法

「満洲国」では十数紙の中国語新聞が発行されていたが、その文芸欄についてすべて当時の紙面を調査・収集し、基礎的な情報やデータを整理・把握する作業から進められる。

次にそれらを分析・考察しながら、新聞別に文芸欄の解題や掲載記事の目録を作る作業に取り組む。

最後に「満洲国」時期の文学にとって新聞の文芸欄が果たした役割や意義について、総合的な考察や論考を通じて明らかにする段取りである。

4. 研究成果

(1) 主要新聞の文芸欄に対する現物調査：「満洲国」では十数紙の漢字新聞が発行されていたが、このうち、大連、奉天（瀋陽）、新京（長春）、哈爾濱の四大都市でそれぞれ刊行された代表的な新聞、すなわち『満洲報』、『盛京時報』、『大同報』、『国際協報』について、まず現物調査や収集作業（閲覧、複写、マイクロフィルムの購入など）をおこなった。その結果、これらの文芸欄のほぼ全部を入手することができた。

このほかに調査した新聞は、泰東日報、関東報、民声晩報、東三省民報、黒龍江民報、濱江日報、康德新聞（各地方版）、満洲日報（邦字紙）、満洲日日新聞（邦字紙）など十数紙にのぼった。

これらの新聞は、中国国家図書館をはじめ、中華全国図書館文献資料縮微中心（マイクロフィルムセンター）、中国東北部の各大学や各地域の図書館や資料館、公文書館などに所蔵されており、また一部は日本の研究機関にもその所在が確認された。

本研究の初歩的な成果として、まず日中両国に分散されているこれらの資料について、その所在を突き止め、あわせて各新聞の所蔵状況を大まかに把握することができたことだといえる。

(2) 各新聞の文芸欄に対する整理・考察と記事見出しのデータベース化：

この作業は上記の現物調査作業と同時に進められた。具体的に各新聞文芸欄の内容を通覧し、その概況（刊行の時期や場所、編集の方針や担当者、コラムの性格など）に対して大局的な把握に努め、記事見出しのデータベース化作業を同時に進めながら、分析や考察を加え、解題や論考の執筆作業に取りかかった。

しかし、研究資料として比較的入手しやすい雑誌や単行本に対して、新聞の文芸欄は膨大な紙面に分散しており、それらを細かく調査・収集し、さらに読破したうえで論証・考察の作業にまで進めるには莫大な時間と労力が必要とされ、きわめて困難な作業であると言わざるをえない。これも新聞の文芸欄に対する研究がこれまでに敬遠されてきた

理由だといえる。

本研究はあえてその難題に挑戦したが、研究期間が終了した現在でも上記の作業がなお継続しており、よりまとまった研究成果の公開はもうしばらく時間がかかる見込みである。

なお、後記の研究成果（発表論文、図書、口頭発表）にあるように、現段階ではまだ限られた一部に留まるが、すでに公開されているものもある。

（3）研究の継続的進行と成果の展望：

今後、上記の研究作業をよりいっそう精力的に進め、データベース化作業を完結させた時点で、資料集として『満洲国時代の新聞文芸欄記事一覧・作者別目録索引』（仮題）を作成し、公刊することを考えている。

また、文芸欄の役割や意義に関する総合的な考察や論考を進め、「満洲国」の文学における新聞文芸欄のはたした役割や意義について、全体的な立場から総括的な研究をおこない、成果として『「満洲国」の新聞文芸欄に関する研究』（仮題）を結実させ、上の資料集とともに公刊を目指す。

（4）本研究の学術的な特色や国内外における位置づけ：

おおよそ以下の五点にまとめられる。

第一に、日本の植民地支配下地域の文学・文化研究の全体において、立ち後れている「満洲」地域の研究状況を改善し、研究を促進させるための前提となる基礎的な史料や先行研究をいま築こうとしていること。

第二に、これまでの研究では個別な作家論や作品論が多かったが、作家や作品が読者や社会とつながる接点となる新聞メディアに関する研究はほとんどおこなわれていない。そのなかで本研究は新しい視点を提示し、研究の空白をいくぶん埋めることができると考えられる。

第三に、研究代表者はこれまでに「満洲国」の文化事象に関して基礎的、日中横断的な研究をおこなってきたが、本研究の完結により「満洲国」時代の文学・文化の全容を概括した基礎的な先行研究や資料集成が作成・刊行されることがはじめて可能となった。そのことにより、日中両国の文学研究における長年の空白が埋められることになり、特に近年、辺境地域の文学や植民地統治下の文学が注目され、文学史の書き換えが試みられている中国近現代文学史の研究分野に寄与するものと思われる。

第四に、国に跨る調査研究活動を通じて、当該分野における日中両国の学術交流を促進したことは評価できると思う。

研究代表者は旧満洲地域の文学・文化をめぐる史的研究に取りかかりはじめてから十年ほど経った。その間にほぼ毎年中国東北部の図書館や研究機関に出向き、研究の基礎

資料となる当時の文献資料を調査・収集してきた。長年の経験から、文献の所在や各地の図書館や研究機関の利用方法などを把握し、熟知している。そのような情報もひとつ大切な成果となるはずだ。

また、調査活動を通じて現地の研究機関や研究者との間に信頼関係や人間関係を築いてきた。例えば、中国東北各地の政治協商委員会（地方政府の協力組織。特に文化・外交などに関する助言や地方史関連の資料収集、出版活動などに携わる）、吉林大学、東北師範大学、吉林省社会科学院、遼寧大学、遼寧省図書館、遼寧省社会科学院、大連市図書館、大連外国語大学、大連民族学院、旅順博物館、黒龍江省社会科学院、中国国家図書館、中国現代文学館、中国社会科学院などの学術機関や社会組織、およびその関係者から多大な協力と支援をいただいた。また、調査活動を契機にそれらの機関が主催する研究活動にも積極的に参加し、学術交流を深めてきた。

国境に跨るだけでなく、歴史認識問題をめぐる対立や衝突、日中両国関係や国際関係などの影響を受けやすい本課題のような研究をスムーズに展開させるために、このような信頼関係や人間関係は欠かせないものといえる。

第五に、「満洲国」という特異な時空間のなかで生まれた文学に対する研究は、たとえば、創作活動に関わる言語の問題、作家のアイデンティティのあり方、文学と政治の関係、異文化間交流の問題など、多岐にわたるさまざまな問題の究明にも役に立つに違いない。

従って、本研究は、単に文学領域に止まらず、「満洲国」研究や日中関係史研究などのより大きな研究課題や歴史学、政治学、社会学、言語学などの研究領域にも研究材料を提供し、刺激や発見を与え、寄与することが可能だと考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 大久保明男、大東亜文学者大会と「満洲国」の「文学報国」——第一回大会と「満洲国」の動静、『人文学報』第448号、査読あり、2011.3.31、pp.105-125。

② 大久保明男、「満洲国」の留日学生仲間同升のこと——「満洲プロレタリア運動史概論」について、『植民地文化研究』第9号、査読あり、2010.7.15、pp.85-90。

③ 大久保明男、「満洲国」の留日学生駱駝生と東京左連、『中国東北文化研究の広場』第二号、査読あり、「満洲国」文学研究会、2009.3、pp.137-156。

〔学会発表〕(計7件)

- ①大久保明男、「関東州」の文化施設概覧、「満洲国」文学研究会 第21回定例会、2011年12月17日、於：日本女子大学 目白キャンパス
- ②大久保明男、東北淪陷区文学研究在日本、〈東亜視野的中国学研究〉国際学術会議、2011年9月17-18日、於：中国・北京語言大学會議中心
- ③大久保明男、大東亜文学者大会と「満洲国」の「文学報国」——第一回大会と「満洲国」の動静、「第6回 植民主義と文学 国際学術会議 アジア主義を問い直す——大東亜文学者大会の表と裏」、2010年12月4日、於：韓国・韓国科学技術大学 (KAIST)・人文社会科学部
- ④大久保明男、「満洲国」文学研究的趨勢和動向、「戦争、区域主体與跨文化流動——台湾、淪陷区、「満洲国」文学比較研究的開創」研討会、2010年9月27日、於：台湾・清華大学・人文社会学院
- ⑤大久保明男、「満洲国」留日学生的文学活動——以駱駝生爲中心、「龍瑛宗及其同時代作家国際学術研討会」、2010年9月24日-25日、於：台湾・清華大学・人文社会学院
- ⑥大久保明男、偽滿時期的話劇概述、「区域文学与区域文学史研究方法」国際論壇 (シンポジウム)、2009年11月24日-25日、於：北京・稻香湖景酒店
- ⑦大久保明男、「満洲国」中国語作家の言語環境と文学テキストにおける言語使用、「第5回 植民主義と文学 国際シンポジウム」、2009年9月26日、於：韓国・韓国科学技術大学

〔図書〕(計3件)

- ①大久保明男ほか、共著『帝国日本の移動と東アジア植民地文学(2)』、韓国・高麗大学校日本研究センター、2011、担当部分：「満洲国」中国語作家の言語環境と文学テキストにおける言語使用 (韓国語版)、pp. 309-345
- ②大久保明男ほか、共著『龍瑛宗及其同時代東亜作家論文集』、台湾・国立清華大学台湾文学研究所、2011、王惠珍主編、担当部分：「満洲国」留日学生的文学活動——以駱駝生爲中心 (中国語版)、pp. 49-378
- ③大久保明男ほか、共著『帝国主義と文学』、研文出版、2010、王徳威ほか編、担当部分：「満洲国」中国語作家の言語環境と文学テキストにおける言語使用、pp. 202-235

〔その他〕

(1) ホームページ

<http://mbk2001hiroba.web.fc2.com/>

<http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/~ohkubo/>

(2) 研究成果の社会還元

本研究テーマと関連する公開講座：

1. 首都大学東京オープンユニバーシティ講座 講師担当 テーマ：「満洲国」の歴史と文化、2009.11.6-11.27 (四回)、首都大学東京飯田橋キャンパス
2. 首都大学東京オープンユニバーシティ講座 講師担当 テーマ：「満洲国」と日本人、2010.11.12-12.10 (四回)、首都大学東京飯田橋キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大久保明男 (OKUBO AKIO)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10341942